





## 出生に関して（1896年～）

---

1896年（明治29年）7月20日、曹洞宗、多宝寺（現・新潟県東蒲原郡鹿瀬町）の第19代住職、阿達天龍と妻との間の長男として生まれる。

本名 一（ひとし）。

「あたしの生家は、多宝寺ってえお寺です。妙峯山多宝寺、鶴見にある総持寺が総本山、その末寺です。」（龍光談）\*1

### 兄弟

長女 マサノ

長男 一（ひとし）→龍光

次女 ミヨノ

次男 操（ミサオ）→多宝寺20代住職 法名 天真

天龍、後妻、リイとの他の兄弟

長女 トキ : 著者祖母。リイは晩年阿達トキ宅に同居

次女 キミ

長男 武男

三女 ムツノ

「そこの総領に本当は生まれたんだけど、8人兄弟いる、あたしはだけど、お寺さんにする気はなかったらしいな、親父は。おれもなる気はなかった。」（龍光談）\*2

### 奉公時代

尋常小学校卒業後、中蒲原村松町（現：長岡市村松町）にいた母親の弟の椎野家へ奉公に。

「その家、そこは菜種屋だ、それとね、セメントだとか、なんとかいっぱいやってましたよ。

（中略）奉公に行ったらしくしてから、酒、酒造りね、それで あたしが酒造りのほうにまわったんだ。あたしは作るほうじゃなく、あの、番頭だから売るほうや。」（龍光談）\*3

---

\*1 \*2 註：「新評」1978年1月号「人間模様・喜劇人たち」より

\*3 註：「新評」1978年1月号「人間模様・喜劇人たち」より

## 1914年（大正3年/18歳）

---

### 1 回目の上京（家出）

「そんなくだらない酒売り仕事を19くらい（遁注・おそらく数え年）までやってましたか。どうも、こりゃね、あたしゃ、そういう商人というのは向かないね、田舎で叔父さんここにいたってしょうがねえっていうんでね、そいで、その、いまでいう家出人だな、東京へ逃げてきちゃった。」（龍光談）\*4

「田舎のこったから、どこの倅（せがれ）が東京までのキップ買ったっていっぺんにわかっちゃうでしょ、だから会津若松までのキップを買ってね、若松で降りて、いっぺん乗り換えて、それで東京へ出てきたわけだ。」（龍光談）\*5

「（汽車賃の5円50銭は）姉（マサノ）があっちこっちから集めてきてくれたカネでしたけど、会津若松で時計買ってね、銀の時計、（中略）それ下げて東京へ着いた」（龍光談）\*6

### 2 回目の上京

この年に新津（新潟）-会津若松一郡山（福島）の開通した磐越西線の車掌の詰襟に白手袋という格好に憧れて、岩倉鉄道学校を志願し、上京。\*7

---

\*4 註:「新評」1978年1月号「人間模様・喜劇人たち」より

\*5 註:「新評」1978年1月号「人間模様・喜劇人たち」より

\*6 註:「新評」1978年1月号「人間模様・喜劇人たち」より

\*7 註:現・現岩倉高等学校。明治30年「私立鉄道学校」として神田錦町に開校。明治36年に「鉄道界の恩人」岩倉 具視(私たちの世代には「500円札の人」として有名ですな)の名字を校名に冠す。昭和23年、泰東商業学校を統合し岩倉高等学校に。現在も鉄道・運輸業界を中心に優秀な人材を送り出している。現在は台東区上野にある。

## 1916年（大正5年/20歳）

---

本郷の区役所の屋上で徴兵検査を受ける。

身体が小さいため丙種（国民兵役に適するが、現役には適さない）とされ、徴兵免除。

当時の身長体重

身長 5尺2寸5分（約160cm）／体重 11貫8百目（約44.25kg）

「その時は『ああ、残念だと』思ったけれども、区役所の2階を降りて外に出たら『ああよかった』と思った。」

「どうせ兵隊にもなれねえんだったら、世の中面白おかしく自分の思うようなことをやって暮らしてやろうと思った。」 \*8

5月 新派俳優の見習生になる。

口入屋（職業紹介所）で「新派俳優見習生募集」という大きな看板を見て。

入会金5円を払って入会。この5円は当時持っていた銀時計（2年前に会津で買ったもの？）で工面した。 \*9

---

\*8 \*9註:立川談志 CD「席亭 立川談志ゆめの寄席」（コロムビア/竹書房）収録／漫談：アダチ龍光「僕の人生」

## 1918年（大正7年/22歳）頃

---

20歳で新派俳優を志し1年か2年。新潟なまりがとれず、女方になる。

「おしろいつけて衣装着て、カツラかぶって、舞台上がってしゃべるとお客が笑う。」\*10

---

\*10 註:立川談志 CD「席亭 立川談志ゆめの寄席」（コロムビア/竹書房）収録／漫談：アダチ龍光「僕の人生」

## 1919年（大正8年/23歳）～

木村マリニーに弟子入り。役者時代、楽屋が相部屋であったの友人の女形、木村春夫（本名：木村莊七）に活動弁士になりたいと相談。春夫の兄貴が大阪千日前の映画館、敷島倶楽部（現・敷島シネポップ）で主任弁士をしていた木村紅葉（本名：木村莊六）。紹介状を書いてもらった。それが大正8年か9年。

しかし紅葉は、すでに木村マリニーと名を変えて弁士をやめ、魔術の道へ。龍光もこれにならう。1～2ヶ月稽古して、浜松の歌舞伎座で初興行。 \*11

【木村紅葉→木村マリニー（本名：木村壯六）その1】

「近藤幸三・著『奇術 その魅力 その世界』には、奇術師・木村莊六について次のように書かれている。大正2、3年の頃、新富座で、ポーランド生まれのアメリカ人奇術師マックス・マリニーに会い、その興行の司会を引き受けることから、木村莊六と奇術とが結びついた」 \*12

【木村紅葉→木村マリニー（本名：木村壯六）その2】

弟に木村壯八（洋画家、随筆家）、異母弟に木村莊十二（映画監督）。

→木村莊十二（映画監督）の手掛けた作品には松旭齋天勝主演「魔術の女王」（1936年）、「エノケンの魔術師」（1934年）もある \*13

【木村紅葉→木村マリニー（本名：木村壯六）その3】

身体は大柄「20何貫ありましたからね」（75kg以上） \*14

【木村紅葉→木村マリニー（本名：木村壯六）その4】

木村莊六の父、木村莊平（1841年～1906年）

※実業家にして、市議会議員をやったり、上野に競馬場を作ったり。正妻の他に多数の愛人を持ち、授かった子供が男13人の女17人の30人。

木村莊平（1841年～1906年）チルドレン

<息子>

長男：莊蔵（いろはチェーンを引き継ぐが、数年でダメにする）

二男：？

三男：？

四男：莊太（作家）

※莊八と同母兄弟

※異母妹の四女清子と同棲

五男：莊五（経済学者）

六男：莊六（活動弁士：木村紅葉→奇術師：木村マリニー）

※アダチ龍光の師匠

七男：莊七（女形の新派役者芸名；木村春夫）

※同部屋だったアダチ龍光が活動弁士を志し相談した。

八男：莊八（挿絵画家・洋画家・随筆家）

※莊太と同母兄弟

九男：？

十男：莊十（直木賞作家）

十一男：？

十二男：莊十二（映画監督）

※手掛けた作品には松旭斎天勝主演「魔術の女王」（1936年）、「エノケンの魔術師」（1934年）もある

十三男：莊十三

<娘>

長女：栄子（木村曙：作家）

※愛人→のちに正妻岡本政との子

次女：伸子

三女：林子

四女：清子（新劇女優）

※異母兄の莊太と同棲

五女：？

六女：六女

七女：七女

八女：八女

九女：九女（クメ）

十女：十女（トメ）

十一女：士女（シメ）

十二女：十二（トジ）

十三女：十三（トミ）

十四女：十四（トヨ）

十五女：十五（トイ）

十六女：十六（トム）

十七女：十七（トナ）\*15

---

木村マリニーの弟子には、アダチ龍光、ドラゴン魔術団の保田春雄、薫陶を受けたメンバーには近藤勝、赤松誉義ら、多数がいた。また、昭和30年代には「莊 六会」という名称のマジッククラブが奈良市（本部）、名古屋、草津、京都、大坂、東京、神戸、姫路にあった。\*16

龍光、最初の芸名は、アダチ莊一（莊六の一番弟子だから）。

初舞台は23、4歳の時。浜松の歌舞伎座にて。

出し物：ひもを2本持って輪を作って結んで、解く手品。

衣装：フロックコート

「さあ、と喜び勇んで舞台上に上がったら緊張でぼーっとしてしまって、何にもわからなくなってしまったの」

「蜃気楼のごとく」

「で、手品のタネ忘れてしまったの」 \*17

木村マリニー一座、4~5人で奇術だけの興行。樺太、朝鮮、台湾にも。1回旅に出ると1年は掛かった。 \*18

---

\*11 註：「新評」1978年1月号「人間模様・喜劇人たち」より

\*12 註：日本奇術博物館 <http://tenichi.exblog.jp/6544752/>

「莊六は、マリニーの公演の司会を続けるうちにマリニーの奇術をすっかり覚えてしまった。そ

して大正8年、プロ奇術師としてデビュー。芸名も木村マリニーとした。」

\*13 註:日本映画データベース <http://www.jmdb.ne.jp/person/p0360330.htm>

\*14 「アサヒ芸能」1966年8月21日号「吉行淳之介対談 人間再発見」

\*15 [http://tonreco.s197.xrea.com/mt/2010/04/post\\_326.html](http://tonreco.s197.xrea.com/mt/2010/04/post_326.html) wikipedia、さすらいのカンチョーマンの日記「男の甲斐性」[http://plaza.rakuten.co.jp/tsurugika\\_zuwo/diary/201002010000/](http://plaza.rakuten.co.jp/tsurugika_zuwo/diary/201002010000/)

\*16 註:日本奇術博物館 <http://tenichi.exblog.jp/6544752/>

\*17 註:立川談志 CD「席亭 立川談志ゆめの寄席」(コロムビア/竹書房)収録/漫談:アダチ龍光「僕の人生」

\*18 註:「婦人公論」1973年3月号「私自身のタネあかし」

## 1921年（大正10年/25歳）

---

9月15日から7日間 大坂・角座で興行。連日満員の大盛況

「魔術王来る」と大書された公演ポスターには、木村マリニー、木村靖子（マリニーの妻）、アダチ荘一（龍光）の顔写真が掲載。\*19

---

\*19 註:日本奇術博物館 <http://tenichi.exblog.jp/6544752/>

## 1922年（大正11年/26歳）

---

大阪から東京へ。

東京の深川「常盤亭」の席亭が元締め東西会(東京の芸人と大阪の芸人合同の組織)に入る。当時26歳。「客に受けすぎて」10日でクビ。 \*20

当時の奇術師は得意のネタひとつで商売していた中、龍光は20種類以上の持ちネタをとっかえひっかえ披露。

客からは大好評を得るものの、芸人仲間から「若造のクセに生意気だ」とねたまれた。

「世の中に芸人もずいぶんいるけれど、客に受けすぎてくびになったのは、俺くらい」（本人談）

高峰筑風(高峰三枝子の父)、神田伯山、都大夫、加賀大夫とで大阪で名人会開催。いろもので出演。筑風が「アダチ荘一なんて、名人の名前ではない」とアダチ龍光と名づける。 \*21

---

\*20 註:「新評」1978年1月号「人間模様・喜劇人たち」より

\*21 註:「芸双書4 めくらます-手品の世界-」編者／南博、永井啓夫、小沢昭一（白水社）1981年刊

## 1923年（大正12年/27歳）

- 関東大震災（9月1日午前11時58分32秒発生の大震災による被害）により、新潟へ帰る\*22
- 9月1日 関東大震災（9月1日午前11時58分32秒発生の大震災による被害）にあう  
「九月の一日に川崎の大正座で名人会をやるから来いっていう太夫元からあれが来て、震災の二、三日前に、台湾巡業から東京にへ先生と一緒に帰って来た。」

八丁堀の製菓会社ハクジンボウ（商品キャッチコピー「三日つけたら鏡をごらん色白くなるホーカー液」）の3階で、同社がスポンサーで名人会の全国巡業を行う打ち合わせ中、震災にあう。

「のぼりつくってあげましょう、舞台でまくカードこさえてあげましょうといろいろ相談しているときにガタッと来ちゃった」

「鉄筋だからつぶれなかったけれども、ゴーっと来たでしょう、陳列の棚がひっくり返りそうになったから押さえていたよ。ずいぶん大きいよ、この地震は、いうて。」

「そこから八丁堀から夕立の合間ぬっちゃア歩いて宮城のお堀まのそばまで来た。」

その後火事の被害が広がる。

「火事になってからが阿鼻叫喚だよ。だれも火を消すやつがいなかったんだから。車坂の宿屋に泊まったから、火の中をくぐって車坂まで奇術の道具やなんか とりに帰ってきたんだよ。」

「宿屋の浴衣着て奇術の道具持って、上野の駅へ行った」

「食うもの、飲むもの、一切なし。広小路あたりをうろうろ探して、森永のキャラメルと蜂印のぶどう酒を買っただけや。」

これらを飲んで食べたら胸やけがするが、外国人が井戸に毒を入れたのというデマがあった。

「谷中の墓地通って日暮里へおりてね、水が湧いてんだよ、モクモク。一升くらい飲んだね。」\*23

- 9月2日～3日 故郷へ帰ることを決意  
「よくる日また上野の山へ来たら、東京、野っ原になっちゃった。なにもない。浅草の観音様だけ残った。これではしょうがない、ひとまず故郷へ帰ろうと。」

赤羽の鉄橋が地震で落ち、赤羽まで歩く。

途中「20銭で川口まで（船で）渡す」というどさくさ紛れ商売人。

「手品のカバン二つしょって向こうへ渡ったよ。」

川口の駅の前は黒山の人ばかり。

移動する罹災民（災害にあった人たち）を運ぶための貨物列車に乗る。

「三日も何も食べていないでしょう。めし食いたくてしょうがないんだよ。蕨あたりまで行ったら炊き出しが出ていた。うまかったよ。（道中の駅で）次から次 に出ているんだよ。」

「それで会津の若松まで行って、手品の道具と洋服のカバン持っていたから、小汚い浴衣捨てちゃって、ちゃんと紺サージの服に着かえてそれでうちへ帰っていきましたよ。」\*24

- 10月 松本へ  
（「九月の一日に川崎の大正座で名人会をやるから来い」と連絡した太夫元から？）  
「信州の松本座へ来いっていう手紙が来たわけや。」

・松本に出かけると、川崎の名人会はメンバーが変わっていた。

・さらに興行のピラには「猫八独演会」の文字が。

「下ビラや、こっちは」

「居直ったって行くところがねえんだから。もう前金もらってるんだから。」

「いや応なしに行ったよ。いや、入ったの、入ったの。」

この時の一座のメンバー：7人

「私に猫八に、なんとかという噺家、それから前座がいて、セコ漫が一組いてさ、それだけなんだ。」

\*25

この猫八は初代 江戸家猫八 (wikipediaより：初代 江戸家猫八。1868年3月 - 1932年4月6日。本名:岡田信吉。かつては歌舞伎役者片岡市之助 (3代目片岡市蔵門の女形)。寄席芸人に転じ、3代目柳家小さんの預かり弟子。) だろう。

---

\*22 註:藤山新太郎氏談 2010年1月7日

\*23 \*24 \*25 註:「芸双書4 めくらます-手品の世界-」編者/南博、永井啓夫、小沢昭一 (白水社) 1981年 より

## 1924年（大正13年/28歳）

---

前年10月より引き続き「猫八独演会」の興行。信州を回る。 月給100円。

「巡査なんかせいぜい五十円だろ。いい月給とりだよ。だから、月五十円くらい、まじめにやれば残るんだよ。おれはバクチで一銭も残らなかったけどな。」

「猫八独演会」興行の内容

龍光：手品だけ50分（声帯模写はやらなかった。）

猫八：物まねと問答（「『尼さんがまたいでも金隠しとはこりゃどうじゃ』てなことを言う  
とワーツとくるわけや。」）

年末、猫八は会津若松で興行を行い、千円の賞与をもらって帰省。龍光はバクチですっから  
かん。\*26

---

\*26 註：「芸双書4 めくらます-手品の世界-」 編者／南博、永井啓夫、小沢昭一（白水社）1981  
年 より

## 1925年（大正14年/29歳）

---

- 1月7日に新年初日を迎える新潟劇場に出演 「故郷に錦を飾る」：新潟に6日間滞在。  
「信州ずーっと回って、新潟へ行ったよ、十二年ぶりで新潟へ。」  
→1923年（大正12年/27歳）の関東大震災で時帰省していた事実があるため、「十二年ぶりで」というのは文字起こしの誤りであろう。「二年ぶりで」が正しいはず。
  - 現地の新聞が「新潟県出身の木村莊一、手先のあざやかなること・・・。」「英米仏五ヶ月の歴遊」などと紹介。  
→龍光が木村莊一から芸名を変えたのは1922年（大正11年/26歳）の時。「英米仏五ヶ月の歴遊」の事実はない。一体なぜそんなことが書かれたのか・・・？  
「そうしたら真に受けたんだ、新潟県民が。これ、村松の酒屋（龍光が10代の奉公時代に身を寄せて働いていた中蒲原村松町・・・現：長岡市村松町・・・にいた母親の弟の椎野家の造り酒屋）にいた小僧や。いとこやらはとこやら、みんな来たよ。」
    - ・一番驚いたのが村松の酒屋の叔父さん（椎野氏）。6日間毎晩飲み連れまわした。
    - ・村松の酒屋の叔父さん（椎野氏）は日本生命の代理店も行ってた。その関係で勧誘員の新年会で一席することに。  
「三十円もらって、二等の切符もらって、行ったよ。」
- ※この時期大正13年、14年に東京楽燕（何の会社??）で事務員として勤務。

\*27

---

\*27 註:以上、「芸双書4 めくらます-手品の世界-」編者／南博、永井啓夫、小沢昭一（白水社）1981年 より

## 1928年（昭和3年/32歳）

---

吉本で音曲をやっていた芸名、国野愛子（本名：中川八重子）と結婚。しばらく共稼ぎ。\*28  
八重子との結婚の際、中川家に養子に入る。

---

\*28 註：「新評」1978年1月号「人間模様・喜劇人たち」より

# 1932年（昭和7年/36歳）

12月、ある日の龍光の1日。吉本興業合名会社昭和7年12月11日出番表より。

「天五葵」「福島花月」「正宗館」をはしご。

**表番出、日十月十年七和昭社會名合業興本吉**

席	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	
花月	小雀	一郎	正光	氣保	養保	山	九里丸	笑	三龜松	枝	三龜松	天小	三龜松	からくり													
俱樂部	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若
天満	枝	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若
三光	枝	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若
天五葵	枝	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若
福島花月	枝	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若
芦	枝	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若
花月	枝	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若
正宗館	枝	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若
角	枝	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若

▲御注意 無断休座は容赦なく下記の如く給料  
より差し引く事を厳守致します  
無断全休一日は給料の二

\*29 Yahooオークション2008年1月出品物より。

吉本興業が経営していた全ての寄席の出演者と時間割を記した出番表（縦93cm×横38.5cm）

掲載されている寄席は「南地花月」「花月俱樂部」「天満花月」「三光館」「天五葵」「福島花月」「芦辺館」「新世界花月」「正宗館」「角座」「三友館」「南陽館」「京都富貴亭」「長久亭」「中座」「京極花月」「笑福亭」「浅草昭和座」「浅草萬成座」「神田花月」「横浜花月」。